駅からぶらり旅

文＝伊藤哲也
写真＝亀卦川 英樹

◎第一二〇回 名寄駅

木原天文台を紹介するコーナー。木原秀雄氏（1911～1993）は高校教諭を定年退職した後、天文台を作り、後進を育てた。

冬来たりなば春遠からじという。この冬の雪の見納めに、名寄駅に降り立った。空は春の気配を秘めて、優しい青を隠している。

まずはレンタカーで「なよろ市立天文台きたすばる」へ向かった。一階の展示フロアに木原天文台のコーナーがある。一九七三年、木原秀雄さんという人が、私設天文台をつくった。自作の天体望遠鏡を持ち、礼文島の金環日食の観測などにも出かけたという。「このきたすばるは、木原天文台の後継として、二〇一〇年にオープンしました。きたすばるでは、石垣天文台との協力による観測もしています」と台長の村上恭彦（むらかみやすひこ）さん。

また、北海道大学が教育研究用に設置した「ピリカ望遠鏡」が設置され、一般にも公開されている。一人の情熱が地元の天文熱を高め、次代の文化の礎となったのだ。

プラネタリウムで「宇宙の模型プラネタリウム誕生物語」（※）というプログラムを見た。最初に当日の夜空が映し出され、夕方から夜明けまで、星天の変化を解説して

（左）北斗七星の隣の「りょうけん座」にある「M51 子持ち銀河」。2つの銀河が渦巻きの腕で繋がっている様子は大変美しく、銀河の中でも特に人気の天体（写真提供/きたすばる）。（下）隕石・小惑星の展示。村上台長が触れている隕石の重さは、約70キロだ。

ピリカ望遠鏡は、公開天文台としては日本で2番目に大きな口径（1.6m）の鏡を持つ反射望遠鏡（北海道大学所有、見学・観望できる時間は公式HPを参照）。●なよろ市立天文台きたすばる／名寄市字日進157-1（北海道立サンピラーパーク内）☎01654・2・3956。13:00～20:00（4月～10月は21:30）※最終入館は閉館時間の30分前。大人410円。休館日／月曜、祝日の翌日（土日をのぞく）、毎月最終火曜、年末年始。

（※）ほかにも「スパーク 宇宙は私たちの中に」などのプログラムがある。上映スケジュールは公式HPを参照。

記事の内容、表示金額は取材日（2025年1月16・17日）時点のものです。予告なく営業時間の変更や休業、商品の販売中止などの場合があります。ご利用の際は予めご確認ください。表記の金額は全て税込みです。

約11年おきに活発になる太陽活動に伴い、日本のような低緯度でも北海道などで観測される「低緯度オーロラ」。現在はちょうど活発な時期で、昨年は名寄でも観測された。今年もチャンスがある（写真提供/きたすばる）。

きたすばるから徒歩数分で、「森の休暇村」のコテージに着く。基本的な調理器具がそろい、二段ベッドが三台（六人分）ある。テラスにはバーベキューコーナーがあり、夏はアウトドアでの食事も楽しめる。

今夜の食材は、地元の会社が作っている豚ジンギスカン。名寄産の酒米「彗星」で仕込んだ日本酒、隣町の美深町で作っているクラフトビールも忘れていない。シェフはいつもの亀卦川カメラマンである。

あいにくの曇天で星は見えなかったが、ほろ酔いの男二人は宇宙の大きさとわが身の小ささを語り合い、夜は静かに更けていった。

翌朝、「パウダースノーサファリ」というスノーモービルによる体験ツアーに参加した。運転は森和季（もりかずき）さん、後部座席にまたがった。ピヤシリスキー場から出発し、NPO法人なよろ観光まちづくり協会の皆さんとともに、林道を走り抜ける。

ゴーグルをあげた顔に、澄んだ冷気が当たり、ピリピリと痛い。これぞ冬の醍醐味である。轟音とスピード感（時速約四十キロ）、アップダウンとカーブを繰り返す白い道。葉を落とした木々は白銀の衣装をまとい、明るい日差しに輝いている。映画のワンシーンに入り込んだ気分である。

くれる。この日は火星が地球から見て太陽とちょうど反対側になる瞬間（衝（しょう））になる日で、夕暮れに東北東の空から昇って、夜明けに西北西の空に沈む。金星と土星が非常に接近するころでもあり、夕方の空に二つ並んで輝いていた。

「宇宙の模型」は、プラネタリウムが生まれるまでの歴史を解説した作品。天文学や宇宙のすばらしさをこうした形にして見せてくれるようになったのは、たった百年ほど前のことだった。

コテージの内部。1階はダイニングキッチンとリビングスペース、2階にベッドがある。バーベキューコーナーとの動線もいい。

（左）道産スペアリブはサラダの上に。白樺の樹液を使ったクラフトビール（美深白樺ブルワリー）とともに味わった。（右）炒めたたっぷりの野菜の上に、豚ジンギスカンを載せた。名寄産豚モモ肉は適度な脂があり、柔らかい。生姜の効いたタレは、日本酒（上川大雪酒造の純米吟醸酒）にもよく合った。

朝日の中で、一本の木が凛々しく立っていた（森の休暇村）。

●森の休暇村／名寄市字日進147（北海道立サンピラーパーク内）☎01654・3・9555。キャンプサイトは春から秋まで、コテージ（5棟）とセンターハウスは通年利用できる。コテージ1棟13,200円（6人まで）。チェックイン15:00～17:00、チェックアウト10:00。パジャマ・タオル類・アメニティと箸は持参。※生ごみ等は持ち帰るか、有料の指定ごみ袋に。ビン・缶・ペットボトルはごみ箱がある。

林道を走り抜けるスノーモービル。この日は3台で行動した。

三十分ほどでピヤシリ山頂付近の山小屋に到着した。薪ストーブに火を入れ、体を温めながら、事務局長の畑中覚是（はたなかさだゆき）さん、観光振興課長の山田裕子（やまだゆうこ）さん、森さんとともに、コーヒータイム。

体力を回復した後、スノーシューをはいてパウダースノーの斜面を登り、およそ五分で山頂に立った。あいにく雲がかかり、視界はよくなかったが、森さんは「晴れていれば、オホーツク海の流氷まで見えます」と言う。太陽が雲に隠れたり、現れたりを繰り返し、その光の加減で山々の連なりが時にモノクロームになる。雪に覆われ、モンスターのような形になった木々の眺めも、幻想的である。

若き日のゲーテが山小屋の壁に書いたという「旅人の夜の歌」という詩を思い出した。

名寄産のもち米で作ったミニ大福を、薪ストーブで焼いて食べる。疲れが吹き飛んだ。

山小屋の中でしばし談笑。向かって右から、畑中さん、山田さん、森さん。

こうした光景に出合うと、眼が洗われるようだ。

ピヤシリ山の山頂（986.6m）で、雪に覆われた木々が迎えてくれた。

見はるかす山々の頂
梢には風も動かず
鳥も鳴かず
まてしばし
やがて汝も休らはん（※）

凍えるような山頂に、静謐（せいひつ）な安らぎが漂っていた。 Ⓙ

（※）西田幾多郎による訳。必要な濁点を補った。九鬼周造（哲学者）の墓碑銘として刻まれている。

◎スキー場が目の前に広がる「なよろ温泉サンピラー」

日本屈指の雪質を誇るピヤシリスキー場が目の前。休憩室も充実しており、ウィンタースポーツの後、ゆっくり疲れをいやすことができる。日帰り入浴10:00～22:00（最終入館21:00）、毎月第3月曜は17:00～22:00、大人500円。宿泊は1泊2食付き2名1室ひとり8,050円（別途入湯税150円）～。

●名寄市字日進 ☎01654・2・2131。

窓が大きく明るい大浴場。泉質はカルシウム・ナトリウム硫酸塩・炭酸水素塩泉。

●なよろ観光まちづくり協会／名寄市東1条南7丁目1-10 駅前交流プラザ「よろーな」1階 ☎01654・9・6711。スノーモービルツアー「パウダースノーサファリ」は1月下旬から3月下旬まで（変動あり）、大人12,000円、7日前までに予約。対象年齢は10歳～70歳、10名まで。ほかにも夏のカヌーツアー、自然・文化体験ツアーなどを開催。詳しくは公式HPを参照。